氏名（本籍）	王　君　香　（　中国　）
学位の種類	博士（　文学　）
学位記番号	博　甲　第　9672　　号
学位授与年月日	令和　2　年　9　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	近代黄河下流域における内陸水運と商品流通

主　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	中西　僚太郎
副　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	丸山　　宏
副　　査	筑波大学　准教授	博士（社会学）	山本　　真
副　　査	筑波大学　准教授	博士（文学）	中野　　泰

論　文　の　要　旨

本論文は、1910 年代から 1930 年代後半の黄河下流域を対象に、黄河の東西方向の長距離水運である航運と南北方向の対岸までの短距離水運である渡運が、流域の経済活動に果たした役割を、沿岸地域における商品流通との関わりを通して明らかにすることを目的としたものである。本論文は序論と結論を含む全 6 章で構成される。

第 1 章「序論」では、従来の研究成果をふまえて、研究の視点と方法、史資料が提示される。近代黄河水運の考察においては、環渤海交易圏における華北経済地域の物資の移出入との関連において、鉄道輸送との関係に着目して検討すること、華北地域研究の観点からは、沿岸地域の市場構造、商品流通のネットワーク、都市と後背地との関係を究明すること、社会経済史の観点からは、伝統的な農村経済の変容との関わりで検討する必要があると指摘する。研究の方法と史資料については、航運の拠点となる碼頭と、渡運の拠点となる渡口の分布を外邦図などを用いて地図化して復元した上で、中国の档案資料や刊行史料、日本の調査資料を用いて、鎮・村落の定期市―県城―拠点都市（済南）という市場構造のなかで、商品流通と黄河水運との関係を商品や農産物の流通範囲や経路を地図化して検討すると述べる。

第 2 章「黄河下流域の碼頭の分布・形態と航運」では、潼関から下流の碼頭の分布を復元し、碼頭は全部で 63 ヶ所あり、省別にみると山東省に最も多く、次いで河南省に多く分布していたとする。碼頭の分布からは、山東省内で航運が比較的盛んであったと考えられ、全ての碼頭は相対的に平坦な場所に立地し、陸路との関係では貨物の集散に便利な交通条件にあり、河南省の場合、碼頭の多くは隴海鉄道の駅と近接していたと指摘する。そして、河南省において黄河と並行する隴海鉄道による物資輸送と黄河水運との関係について、両者は水運物資の一部が鉄道輸送に代替されるなど競合関係にあったが、蘭封県の事例では、鉄道輸送は農産物を中心とし、黄河水運は主に重量が重い石油、石炭などを輸送していたこと、物資の移出先は隴海鉄道は鉄道沿線を主としていたが、黄河水運は黄河沿岸を中心としていたことを指摘し、ある程度の役割分担が行われていたと主張する。

第 3 章「黄河下流域の渡口の分布と渡運」では、黄河の鉄謝鎮から下流における渡口の分布を外邦図によっ

て復元している。仮製十万分一図に基づき黄河下流域の主流における渡口を復元すると、全部で178ヶ所あり、その分布は河南省には少ないが、山東省には河口付近を除いて密に分布していた。その要因として、山東省では黄河の河道に砂が河南省ほど堆積しておらず、かつ河幅が狭かったことを指摘する。そして、渡口は陸上の交通路を結ぶ役割を果たしており、その大部分は県道や村道と黄河の交差点に設けられていたこと、渡船の利用は人を中心としながらも、荷車、自転車、牛馬、米麦なども運ばれていたことを明らかにしている。

第4章「黄河下流域の定期市の分布と機能－山東省を事例に－」では、山東省を中心とする黄河沿岸における定期市の分布と機能を検討し、黄河水運との関係を考察している。まず、清代から民国期に至る定期市数の変化を検討すると、黄河沿岸地域の各県においてその増加が顕著であることから、沿岸地域の商品流通は清代から民国期にかけて活発化したとみることができ、商品流通の活発化は水運の利用も促進させるため、定期市の増加は間接的に黄河水運の発達を示していると指摘する。定期市の規模と機能については、臨清県、鄒平県と歴城県王舎人荘の事例を取りあげて検討している。臨清県では定期市は大集と小集があり、大集の分布間隔は4～9kmでほぼ等間隔に分布し、小集はその中間に位置していたこと、定期市の機能について、鄒平県と歴城県王舎人荘の事例では、取引される商品は周辺の農村で生産された農産物を主としていたが外来の物資もあったことを指摘する。そして、定期市の取引物資と黄河水運との関係を、濼口碼頭を経て黄河沿岸の各地に移入された物資を通して検討し、定期市で取引された塩、燐寸、石油、小麦粉、砂糖、棉糸、石炭など、農家が生産し難い、あるいは不可能な日用品は黄河水運によって沿岸各地に移入されたことを明らかにしている。

第5章「黄河下流域の農産物流通－山東省を中心に－」では、まず黄河沿岸における農産物の流通について、農産物の生産をふまえた上で、済南を中心とする流通範囲と輸送手段を検討し、さらに棉花を事例に農民から定期市を経て済南市場に入る過程を明らかにしている。黄河沿岸は山東省における農産物の重要な生産地であり、生産された小麦、大豆、落花生と棉花は主に済南へ移出された。済南への輸送手段は地方によって異なったが、陸路の荷車、黄河の民船、鉄道および貨物自動車などが利用され、黄河の渡河には渡船が利用されたと述べる。棉花の流通に関しては、臨清県で生産された棉花の大部分は農村の定期市を経て県城に集荷され、済南などへ移出された後、青島、上海などに輸送されたと指摘する。続いて濼口碼頭を中心とする黄河水運による物資の輸送、およびそれと鉄道との関係を検討している。黄河下流域沿岸から濼口碼頭へ移出された農産物は、大豆、落花生、小麦、雑穀、果実、鶏卵などであり、濼口碼頭を中心とする水運の集荷範囲は、河北省の黄河沿岸より河口に渡り、左岸は幅40～50km、右岸は幅30kmの地域に及んでいたこと、これらの農産物の一部は濼口駅に運ばれ、津浦鉄道と膠済鉄道で徐州、東光、坊子、青島、南京、上海などへ輸送されたことを明らかにしている。そして、濼口駅経由の農産物の移出状況から、水運は鉄道と補完関係にあったとし、黄河水運は下流域の農産物の流通に重要な役割を果たしていたと主張する。

第6章「結論」では、全体を総括した上で、主要な論点に沿って研究成果を提示している。黄河水運と鉄道の関係については、蘭封から上流の隴海鉄道沿線では、両者は競合関係にあったと同時に、物資の移出先や輸送物資の面では、ある程度の役割分担がなされており、碼頭と鉄道駅の位置関係からは連携機能も有していたと考えられること、蘭封から下流では、黄河水運は鉄道と補完関係にあり、濼口・済南を経由して青島、天津と結びつき、沿岸地域の商品流通の発達に重要な役割を果たしていたと主張する。清代から民国期にかけての黄河下流域の水運の変化を、山東省における定期市分布の変化を通してみると、黄河沿岸地域では定期市は増加しており、これは商品流通の活発化と同時に水運の発達を示唆し、山東省内に碼頭が多く存在し、渡口が密に分布していることは、水運の発達を如実に示していると指摘する。濼口碼頭を経由して黄河沿岸の各県が移出入した物資には、外国から輸入された石油、燐寸、砂糖があり、黄河沿岸地域から原料として移出されて、済南や青島などで加工され生産地に戻った棉糸、小麦粉などの加工品、華北の他地域から移入された塩と石炭もあったことから、黄河沿岸地域は外国貿易の影響を受けると同時に、華北内部の地域経済からの影響も受け

て商品経済化が進んでいた。そして、黄河の航運によって黄河沿岸地域から移出された物資の中には大豆、落花生、小麦、陸路輸送を補う形で渡運によって輸送された物資には棉花などがあり、その他に牛骨や鶏卵などは青島を経由して海外に輸出されており、黄河沿岸地域は外国貿易の影響を受けて農業生産を行うようになっていたと主張する。以上をふまえて、当時の黄河沿岸地域は環渤海交易圏の後背地となっており、近代産業の発達とともに伝統的な農村経済は商品化が進み、済南を中心とする市場圏では、黄河水運は津浦鉄道と膠済鉄道による貨物輸送によって青島、天津と結びつき、環渤海交易圏の一部をなす華北経済地域の形成に寄与していたと結論づけている。

審　査　の　要　旨

１　批評

近代の黄河下流域に関して、従来の研究者の関心は水利や治水に集中し、水運に関しては実証的な研究は非常に乏しい状況にある。その理由として、近代の黄河水運は盛んではなく、社会経済的にも重要でなかったとの一般的な認識と、水運に関する直接的な史資料の不足がある。それに対して本論文では、近代の黄河水運は衰退していたわけではないという、近年の研究による問題提起を受け、その問題を深めようとしている。史資料の不足については、数少ない水運の実態を示す史資料を用いるのみならず、碼頭や渡口の分布、定期市の分布密度、沿岸地域の農産物生産や流通など、水運による物資輸送や商品流通と間接的に関わる事象の検討によって補い、水運が沿岸の地域経済に果たした役割を解明しようとしている。その際、従来の研究では十分に利用されていない外邦図などの地図資料を活用するとともに、データの集計、地図化などにおける緻密な作業をふまえて論を展開している点は大いに評価できる。結果として、近代黄河下流域の水運は盛んに行われていたことを実証できており、水運は鉄道の発達と結びついて、青島・天津を中心とする華北経済地域の形成に寄与していたという解釈を、説得力をもって提示している。ただし、黄河下流域を対象とした研究とはいえ、商品流通の検討はほぼ山東省の事例に限られていること、山東省内の検討に関しても地域差の検討が十分でないことなど、さらなる検討が望まれる部分もある。そのような課題を含むとはいえ、本論文は近代の黄河水運に関して、新たな事実とオリジナルな解釈を提示した研究として、学界に寄与するところが大きいと評価できる。

２　最終試験

令和２年７月７日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会（オンライン会議）において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。